

京都・大阪方言における待遇表現の変容

石橋 孝章

本修士論文（以下、本論文）は、京都・大阪方言の待遇表現について、現代における運用の状況や変容を明らかにするものである。

まず、第一章で研究の目的について述べた。

京都・大阪方言のハルは、話し相手待遇では尊敬語として機能するが、特に京都市方言で、第三者待遇では幅広い動作の主体を待遇できる。たとえば、「猫が歩いたはる」などといえる。全国的な方言衰退現象のなかで、このハルに変容や共通語化の傾向がみられないかということは確かめる必要がある。そこで、京都・大阪方言におけるハルを中心とした待遇表現を研究対象とした。

続いて、第二章では先行研究を検討した。

これまで、泥棒、動物、身内など、共通語の尊敬語の対象にならないものに対する第三者待遇でのハルが報告されてきた。「親愛語用法」（岸江信介（一九九八）「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」国立国語研究所編『日本語科学』三二・三・四六頁 国書刊行会）や「三人称指標機能」（辻加代子（二〇〇二）「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」——自然談話資料を用いた事例研究——国立国語研究所編『日本語科学』一〇 五六・七九頁 国書刊行会）など、理論的説明も提出されているが、調査はまだ十分なものとはいえない。近畿方言では、第三者待遇で待遇表現を多用する傾向があるといわれる（宮治弘明（一九八七）「近畿方言における待遇

表現運用上の「特質」『国語学』一五・一 三八・五六頁 日本語学会）が、この現象は特に女性に顕著なため、ハルの研究も女性話者に注目したものが多かった。しかし、女性話者の傾向を明らかにするためには、男性話者についても調べなくてはならない。

また、尊敬語としてのハルが共通語の敬語といかに使い分けられ、どの程度の待遇度を表すのかという点も十分明らかにされていない。

大阪方言のヤルについては、運用の仕方に変化がないかということに加え、形式そのものの衰退がみられないかを調査する必要がある。

上記の課題をふまえ、行なった調査の概要を第三章で述べた。

調査対象地域は、京都府京都市、大阪府大阪市、枚方市、堺市とした。

大阪方言については、ヤルについても調査した。

京都市方言話者については、京都市で言語形成期を過ごした話者にインタビュー調査を行なった。一〇代女性一名、二〇代女性七名、二〇代男性三名、五〇代女性二名、五〇代男性二名、六〇代女性一名の一六名である。また、京都市上京区の高校の生徒を対象に、アンケートを実施した。有効回答は、男子四〇名、女子四〇名であった。

大阪市においては、インタビュー調査を二〇代女性三名、二〇代男性二名、五〇代女性二名、七〇代女性一名に対して行なった。さらに、大阪市以外の若年層の現状も明らかにするため、枚方市・堺市の小学校でもアンケート調査を行なった。

続く第四章では、京都市方言についての調査結果をまとめた。

ハルの語形については、中井精一（一九九二）「関西共通語化の現状——大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって——」『阪大日本語研究』四 一七・三二頁 大阪大学文学部日本学科（言語系）で京都型とされたものを従来の形と考えた。これは、五段動詞、カ変動詞、サ変動詞への接続が、それぞれ、イカハル、キヤハル・キヤハル、シヤハル・シヤハルとなり、テ

イル形がタハルとなるものである。調査の結果、一〇代・二〇代は、イカハル、キハル、シハルという回答が多かった。ただし、高校生の結果では、キヤハルもしくはキヤハルが保存されている場合には、シヤハルもしくはシヤハルも保存されていることが多かった。また、テイル形については、どの世代でもタハルがある程度保存されているが、テハルも同程度みられた。キハル、シハル、テハルを使うのは、中井精一（一九九二）によると大阪型であり、京都市の若年層において、五段動詞の接続以外では大阪型と同形になってきているといえる。近畿地方における大阪方言の地方共通語化が、ハルについてもいえるということかもしれない。

次に、話し相手待遇の目上に対してのハルについては、若年層では、男女とも親しい先輩には使えるが、高い待遇となると、女性ではある程度使う話者がいる一方、男性は使わない傾向にあった。

レル・ラレルについては、男女各世代とも、話し相手かつ動作主が目上の人物である場合に使われやすいだけでなく、動作主（話題の第三者）が目上でない場合も聞き手が目上なら使われやすく、一方で、友達と話すときには動作主（話題の第三者）が目上でも使われにくいことがわかった。対照的に、ハルは、話し相手としての校長先生を待遇するときよりも、第三者としての校長先生を待遇するときのほうが、聞き手に関係なくよく使われている。

井上史雄（一九八一）「敬語の地理学」『國文學—解釈と教材の研究—一月臨時増刊号 敬語の手帖』二六・二 三九・四七頁 学燈社）は、尊敬語や謙讓語を目上の人が目の前にいないときにはあまり使わないという、丁寧語に近い発動の仕方を「敬語体系全体の丁寧語化」と呼び、全国的にみられるとした。今回の調査では、京都市においても共通語形のレル・ラレルがこの「丁寧語化」にあてはまる運用の仕方で行われているにも関わらず、ハルの運用の仕方には影響していないことが明らかになった。

また、話し相手待遇のレル・ラレルとハルの使用や、自分が使われたときにどう感じるかという意識についての調査から、特に若年層では、レル・ラレルが非常に目上の人物に使う尊敬語で、かつ聞き手も目上であるときに使う表現とされており、ハルとのすみわけが進みつつあるといえる。複数の話者から聞かれたキーワードである「親しみ」と敬意を同時に表すハルと、共通語の敬語との違いが意識されていると推測できる。

目上の人物に対する待遇表現は、レル・ラレルとハルの使用場面や役割の違いが明確になってきている点で変容しているといえるが、レル・ラレルの使用条件の「丁寧語化」は、第三者待遇で待遇表現を多用するという体系全体には影響を及ぼしておらず、ハルとレル・ラレルのすみわけもある点を考えれば、ハルは今後も生き残っていくと考えられる。

本章では、調査をふまえ、ハルの機能についての理論的説明も試みた。第三者の動物、父親、知らない人、目下の人物などを待遇するハルは、尊敬語のハルの拡張として、「低めない」という機能があると説明できると考える。第三者のボーイ捨てをした知らない人に対するハルは、尊敬語とはかけ離れているようにみえる。しかし、第三者の目下にハルを使わない傾向の高校生男子が、第三者のボーイ捨てをした人には半数以上が使うとしたことから、ハルを尊敬語と捉える意識が強く、ボーイ捨てをした人であっても知らない大人であるから「低めない」ためにハルを用いるのだと説明できそうである。また、動物、父親に対するハルは、調査の回答から、「親しみ」や「距離を置く」という意識で使われることが多いのだが、これらの意味合いは尊敬語のハルの性格と繋がる部分がある。

次に、第五章で大阪方言について述べた。ハルの語形については、中井精一（一九九二）などから、大阪方言では、従来、五段動詞にはイ段で接続し、五段動詞以外には連用形にハルで接続、テイル形はテハルの形をとる、というものであったとみられる。大阪市に

おける調査結果から、先行研究で大阪型とされていたキハル、シハル、テハルが世代に関わらず使われているが、五段動詞については、若年層を含めてア段接続（イカハルなど）がみられる。古くは大阪でも使われたア段接続が残存しているのか、京都からまた近年流入しているのかはわからないが、京都のイカハルに対して大阪はイキハルである、とは単純にいえないようである。

大阪市におけるハルは、話者によっても分かれるが、高い待遇を表わせない場合があり、おおむねレル・ラレルがそれに代わる高い待遇を表す。また、京都市と同様、ハルについて「親しみ」というコメントが複数の二〇代話者から得られた。

話し相手待遇で非常に目上の人物にハルを使っていない話者は、第三者待遇では使う場合が多かった。第三者待遇で待遇表現を多用する近畿方言の特徴から、第三者待遇になったときに、方言形のハルが選択されたと考えられる。

「ケガをした知らない大人の男性を話題の第三者として待遇する場合」にハルを使うかという質問では、大阪市の二〇・三〇代、五〇代、七〇代いずれも使うと回答している。しかしケガをしたのが中学生の場合や、「ポイ捨てをした大人の男性」の場合は、二〇・三〇代全員が使わないというケガをした大人の男性には第三者のハルを使い、中学生には使わないことから、若年層では第三者でもあくまで尊敬語のハルとして運用されていることが推測される。知らない大人の男性は、レル・ラレルで高める対象とまではいかないが、中学生に比べれば、ハルによって「低めない」待遇をすべき対象と捉えられているのかもしれない。

枚方市・堺市については、小学校での調査から、「ケガをした知らない大人の男性」に対するハルを使う話者は約一割いたが、使わない人が多数派であった。

動物や父親は、共通語の尊敬語の対象にならないが、これらに対しては大阪市でも、枚方市・堺市でも、第三者待遇のハルが使われない。大阪方言では、第三者待遇のハルについて、京都方言よりも純粹な尊敬語としての意識が強いと考えられる。

ヤルについては、大阪市ではゆるやかに勢力を失っているようであるが、二〇代でも使用例があり、二〇代、五〇代、七〇代いずれも、第三者待遇で同輩や目下を使うという従来の用法と同様であることが確認できた。

以上の内容を、第六章でまとめた。世代間で傾向を比べるには調査が不十分なことなど、課題も残ったが、ハルと共通語形レル・ラレルのすみわけが進みつつあることなど、京都・大阪方言における待遇表現の変容の一端を、本論文は明らかにした。

『それから』における愛とイデオロギー

——〈従属〉と〈抵抗〉の表象を中心に——

ユリアン・ファン・デル・メル

本論文の目的と思想的背景

本修士論文は、夏目漱石の長編小説『それから』を分析する試みである。主人公の長井代助とその旧友の妻である三千代との愛をその主眼とした。彼らの恋愛の形成過程には、言うまでもない代助と三千代本人のほかに、嫂の梅子も重要な役割を果たしたと思われる。しかし最終的に二人の恋愛は成就せず、三千代は生死を彷徨い、最終回では代助も気が狂ったような振る舞いを示し、小説はオープンエンドのような感覚を読者に残すまま結末を迎えてしまう。本論を四つの章に分け、第一章から第三章では、代助、梅子、三千代という三つの人物に一章ずつ割り当て、小説内のそれぞれの役割を分析し、第四章ではその分析を踏まえて『それから』の結末に焦点を当てた。

各章の概要に入る前に、まず先に修士論文の思想的背景に簡略に触れておこう。タイトルにもあるように、本論文の主なテーマは『それから』における愛とイデオロギーなのだが、この二つのキーワードは具体的に何を指すか説明しておく必要がある。また、副題にある〈従属〉と〈抵抗〉という概念を切口に『それから』における愛とイデオロギーというものを捉えようという試みだが、これらの語句はまた何を意味するかを以下に説明する。

修士論文概要

イデオロギーという言葉を使用する際に、ルイ・アルチュセールの有名なイデオロギー論にみる国家イデオロギー諸装置を強く意識している¹⁾。啓蒙主義時代の哲学においては、人間は自由な、一つの独立した個人として考えられていたのだが、第二次世界大戦後のヨーロッパ（特にフランス）で出現した思想においてはこの自由な個人のイメージは、ある近代国家イデオロギーに従属する主体という批判的な理解へと一変した。そして、従属する主体を成す過程を最もはっきりと論じたのはルイ・アルチュセールである。アルチュセールの論文に依ると、近代国家を支える、警察や軍隊などのような、暴力的に諸個人を国家イデオロギーに服従させる抑圧装置の他に、諸個人に公的なアイデンティティを用意する国家イデオロギー装置というものが存在している。この国家イデオロギー装置というのは例えば、教育装置、宗教装置、法的装置など、様々な形を持つ。このような諸装置が我々の価値観や好み、まるで我々のアイデンティティそのものを形成する過程において不可欠な機構だが、抑圧装置とは対照的に我々はこれらの諸装置が用意する公的なアイデンティティを無意識に受け入れ自発的に求める、というところが国家イデオロギー装置のメカニズムの特徴である。この公的なアイデンティティという「呼びかけ」に応じる我々はこうして国家イデオロギーに従属する主体となってしまう、一人の人間が例えば〈信者〉でもあれば、〈教育者〉でもあり、〈配偶者〉でもあり〈父〉でもあり、同時に様々なアイデンティティを持つことが可能である。尚、この公的なアイデンティティは、資本制国家イデオロギーの再生産を保証するように仕向けられている。

以上、アルチュセールのイデオロギー論を簡単にまとめてみた。では、このイデオロギー論は愛というものと如何に関係しているのだろうか。本論文では愛というものを国家イデオロギー装置の一つとして理解している。なぜなら、近代における愛という概念は、近代以前とは違って、男と女、

すなわち異性のあいだの愛を指すものであり、本論文でも示すように、この固定概念がまさに西洋からの輸入物としての資本制思想を基に近代化する日本の国家イデオロギーを強化する一環として機能していたと言えるからである。尚、そういった愛という装置がジェンダー化された理想像（男らしい男、女らしい女）を要求するのである。そして、アルチュセールの言葉を借りて述べると、自発的かつ無意識にその呼びかけに応じた瞬間に、諸個人は国家イデオロギーのなかに組み込まれていき、その再生産を保証する機能を持つ従属的主体となる。

しかし、本論文で興味を持っているのは、自由な個人が従属する主体となる瞬間のみならず、むしろ、その主体が国家イデオロギーの呼びかけに対して抵抗を示すという現象である。従って、本論文では『それから』の登場人物が、男女の理想像を要求する、近代の国家イデオロギー装置として機能する異性愛にどこまで〈従属〉し、どこまで〈抵抗〉を示すかという点に着眼しつつ、様々な視点と方法を取り入れ『それから』の分析を試みた。以下、各章の概要に入る。

第一章 代助ははたして男なのか

― 身体表象におけるジェンダー的差異化 ―

以上に説明した思想的背景を踏まえて、第一章ではまず代助のジェンダーを問題にした。より具体的に言えば、彼の身体の描写に着目することによって近代における男性の理想像からかけ離れた存在としての代助を確認した。明治時代に入ってから前代未聞のペースで工業化する日本では性別分業観が出現し、強くたくましい男は労働し、弱くて哀れな女は家庭内で育児をする、という男女の理想像が誕生した。このような言説を支えたのは言うまでもなく、男性を絶対的な優位に置いた家制度であり、家父長的資本

制である。^②

しかし、代助は著しくそのような男とは程遠い人間である。代助は肉体労働どころか、定職にさえ就かず、実家からの仕送りでかなり豪華な暮らしをしており、結婚にも無頓着である。小説を一貫しているこの矛盾だらけの彼の態度は冒頭にみる代助の身体描写が暗示していた。蓮實重彦も指摘するように、漱石の小説はよく主人公が横たわっている姿勢の描写から始まることが多いのだが、『それから』も例外ではない。彼の「不動」の姿勢、また洗面所の鏡に映した柔らかい肉体と「丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般」^④である動作は彼の女々しさを強調している。換言すれば代助はいわば、国家イデオロギー装置の呼びかけに〈従属〉せず、むしろ〈抵抗〉を示している存在であると言える。

すなわち『それから』を、代助が三千代への愛情を自覚し、その気持ちによって初めて動かされる代助が男になる過程を物語る小説としても捉えることができる。第二章と第三章では彼を動かす梅子と三千代の役割に着目した。

第二章 嫂・梅子の役割について

― 良妻賢母の〈抵抗〉 ―

第二章では嫂の梅子の役割について考察した。代助と三千代の愛の成立過程には梅子が不可欠な役割を果たしている。もつと言えは、梅子なしには代助は三千代への愛情に気づくことはなかっただろうとまで言えよう。本章では、代助と梅子が会話を交わす場面が非常に多いのだが、そのやりとりのうちに代助が三千代を異性として意識し始めると論じた。

尚、梅子が明治時代の女性を象徴する典型的な良妻賢母として描かれており、代助にとって母親のような存在になっていることが佐々木充の指摘

した通りだが、本章で示すように、梅子はその国家イデオロギーの要求に〈従属〉するだけでなく、代助への送金などで彼の純愛を応援することに よって良妻賢母という紋切り型から抜け出そうと、〈抵抗〉する姿も見受 けられる。

第三章 三千代における〈抵抗〉と〈従属〉

—真珠の指輪を視座に—

第三章では三千代の存在意義に着目した。特に有名な真珠の指輪の場面に注目した。漱石がこの場面を書くに当たって相当な工夫を施したことが自筆原稿にみる多くの添削の箇所を見ても分かる。本章では、その添削の跡を辿りながら、これまで夥しい先行研究で論じられてきたこの場面での三千代の打算的な意図の有無について新たな見解を提案した。そこで、真珠の指輪は二つの役割を果たしていると論じた。まず、この指輪は三千代にとって、子供を失ってしまい主人の平岡を満足させられないことで喪失した、様々な意味で再生産的機能を負担するはずの女性としての価値を挽回する手段である。また、真珠の指輪は代助を不動の男から動く男にし、彼がそれまで忌避していた国家イデオロギーの呼びかけへ応じさせてしまおうとする、〈従属〉させる効果をも持っていたと考えた。

第四章 『それから』の結末に見る〈抵抗〉

—代助のヒステリーと攪乱—

本章では以上の三つの章を踏まえて『それから』の結末に集中した。『それから』の最終回は、他の回の原稿に比べて三枚も長く書かれていることが興味深い。漱石はどのような意図で最終回だけを少し多めに執筆したの

か。また、結末の場面はなぜオープンエンドのような印象を残さざるを得なかったのか。本章ではこの二点の問題について考察した。

まず、ホモソーシャル、すなわち広範囲の意味での男同士の絆という、イヴ・セジウィックによって展開された概念を紹介した。セジウィックによるとこのホモソーシャルの秩序は、『それから』が書かれた時代の日本の地にも根を張りはじめた資本主義家長制と不可分な要素である。しかし、代助は最終回でヒステリー症のような振る舞いを提示することによって男同士の絆という国家イデオロギーに〈抵抗〉的姿勢を呈する。もし仮に、最後に三千代が死んだ、あるいは代助が佐川令嬢との縁談を承諾するなり三千代と結婚して就職し男性の理想像の応じるなりの描写で結末を迎えたとするならば、言わば国家イデオロギーの勝利に終わっていたのだが、敢えてそのような判然たる結末を避け、赤く染まる世界と正気を失う代助を重ね合わせた抽象的描写を引き伸ばして拡大する工夫によって『それから』は攪乱の可能性を秘める〈抵抗〉的小説としての性格を保つことができたと解釈できよう。

注

- (1) アルチュセール、ルイ『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』(西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳) 平凡社、二〇〇五年五月。
- (2) 上野千鶴子『家長长制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、一九九〇年一〇月。
- (3) 蓮實重彦『夏目漱石論』青土社、一九七八年一〇月。
- (4) 『それから』本文の引用には岩波書店の『漱石全集』第六卷(一九九四年五月刊行)を使用した。尚、ルビは省略した。
- (5) 十川信介編『漱石自筆原稿 それから』岩波書店、二〇〇五年九月。

北陸古社寺縁起の研究

山吉 頌平

はじめに

本修士論文は北陸の寺社縁起の分析を主眼とするもので、越中・加賀・能登・越前の四か国の古寺社の縁起の成立過程を中心に扱う。具体的には、立山縁起、『喚起泉達録』、気多社縁起、氣比社縁起、『大永神書』の分析を行い、古伝承を基にするとされた縁起等の文献が中世、近世に大きな変容を経たものであることを指摘し、今後の研究の在り方や展望を描く。

第一章 越中立山縁起伝本考

越中立山の最古の縁起は『伊呂波字類抄』で、この他にも中世にまでさかのぼる数種の縁起が伝えられるが、立山在地の縁起、すなわち荻峠寺、岩峠寺いわらじの立山信仰を担った二つの勢力によって作製された縁起は近世のものしか現存していない。これらの縁起群の系統を巡っては安田良栄氏によって系統分類が試みられたが、その論拠には不十分な点が多く、また個々の縁起への十分な考察が踏まえていなかった。本稿では、『伊呂波』以下近世の在地縁起に至るまでを網羅的に分析し、近世立山縁起の系統をはじめて明らかにした。

荻峠寺では戦国期の兵乱により伝来の縁起が散逸してしまったことが推

測される。これを反映してか江戸初期に提出された書上に載る祭神解釈は統一されず、異説が多く見られる。やがて近世に再発見された『伊呂波字類抄』や岩峠寺系縁起を撰取して新縁起が荻峠寺で作製され始め、開山者の作に仮託された『立山大縁起』が根本縁起として定着していく。

一方、岩峠寺では、江戸初期の書上を見るに、祭神解釈の統一が見られ、また岩峠寺系縁起をもとにした『和漢三才図会』所収縁起もこうした書上と同様の説を記載していることから、江戸初中期の岩峠寺では中世以来の縁起が伝来し、社説もまた継承されていたことが窺える。しかし、それらの縁起はやがて散逸してしまつたらしく、江戸後期に岩峠寺は延命院を中心に荻峠寺の縁起などを撰取し江戸初期とは様相を異にする縁起群を生み出していく。

本稿では、こうした各寺院の縁起を時系列に沿って綿密に分析していく作業を通して、先行研究で現存縁起群の原典とされてきた開山者仮託縁起や、在地縁起では最古級のものと考えられていた縁起が、実は江戸時代後期の成立であることを論証するとともに、現存縁起群は荻峠寺の縁起が岩峠寺の縁起を取り入れて増補した後に、その縁起を岩峠寺がさらに撰取して付会を重ねていく、複雑な過程を経て形成された事実を明らかにした。

第二章 『喚起泉達録』小考

富山藩士野崎伝助（?～享保十六（一七三二）年）によって著された『喚起泉達録』は、他書には見られない越中の古代から中世に至る歴史を記す、謎多き書物である。本書には、『記・紀』に載らぬ豪族阿彦と大若子命の闘いなどの古代の伝承を描き、近年注目を集めている。越中の古伝を知る古老の語りの聞書、と序にいうが、先行研究ではその真实性を巡り肯定的な見方と否定的な見方とに分かれている。

本章では、『喚起泉達録』の記事の検証を行い、新たにその典拠を指摘した。例を挙げれば、『泉達録』には、越中の神が神代の事績を語り聞かせたという故事を記し、その神話語りを掲載するが、その語られる神代の出来事の描写というものは、流布本系統の『太平記』に記載されるものの流用なのである。また『人国記』の記事も同様に典故を伏せて本文に撰取されているが、この引用が古本を改訂した版本『人国記』の本文をもとにしている事実を示すことで、先行研究では伝助の没年がその成立の下限とされるのみであった本書の成立年代の上限を導き出した。加えて、上杉流の兵法書に想を得たと考えられる描写が、『泉達録』中に散見されることを発見し、伝助が要門流兵法を学んでいた可能性を指摘した。こうしたことから、本書が古老の聞き書きではありえず、仮に古伝承が背景にあったとしても、本書に記される物語はかなりの潤色を加えられている可能性が高いといえよう。

第三章 『氣多神社古縁起』と謡曲〈鵜祭〉

能州一宮氣多大社には室町時代末期の書写と推定されている『氣多神社古縁起』と通称される卷子本の縁起が伝来する。この縁起は、氣多社の衆徒方（寺家）の寺院であった正覚院に伝来し、後世の写本が氣多社の神官方にも伝来していた。氣多社の由来や歴代の天皇の寄進などを記すこの縁起は、泰澄伝承など、神宮寺の起源を語る記述の豊富さから、恐らくは寺家の側で作製された縁起であろうと考えられる。また、正覚院本には「当社根元縁儀可大切者也」との識記があるように、根本縁起として重要視されていた。

しかしながら、現在に至るまでこの縁起の成立過程や縁起中の説話については本格的に考察されることがなく、氣多社諸縁起中における本縁起の

位置も不明確なままであった。そこで本稿では、『氣多神社古縁起』に記載された内容や同時代の周辺史料を細かく分析していくことで、当社で中世に行われていた社説を浮かび上がらせる。そうして浮かび上がった祭神解釈などが、先行研究においてその特異な関係が指摘されていた吉田家の神道説を濃厚に反映しているものであることを確認する。こうしたことから、『古縁起』成立が先行研究で説かれていた年代より下る、吉田家と氣多社の交流が開始されて以降の作製であることを明らかにする。また、そうした作業を通して、祭神を女神とする異説の存在を明らかにした。また、それに関連して、当社の縁起を基につくりだされた金春流独自の能〈鵜祭〉にも、『古縁起』と通底する中世の社説が濃厚に反映されており、一見不可解ともとれる詞章や祭神を女神とする〈鵜祭〉の演出が、そうした社説に由来することをも解明した。

これらを踏まえたいうで、『氣多神社古縁起』の成立年代、ならびにその本文に詞章が撰取されている〈鵜祭〉の成立年代の下限を提示する。

第四章 氣比・氣多・宇佐―交錯する縁起―

氣多社の縁起の中核を占めるのが、氣多社祭神が靈験を發揮したという神功皇后による三韓征伐譚である。しかし、こうした伝承は付会として片づけられ、なぜ能登の地で三韓征伐譚が伝承されるのかは検討されず、縁起中で言及される『八幡宇佐宮御託宣集』との関係についても、縁起の形式や語句の類似性が指摘される以上の考察はなされてこなかった。

本稿では、三韓征伐譚や『託宣集』が縁起中に見える理由、また『氣多社嶋廻縁起』に、他の氣多社縁起群には描かれぬ、「異国から渡来した王子」という特異な神の姿が語られる理由が、氣多社祭神を八幡と重ね合わせようとする社説によることを明らかにした。

前半部では気多と宇佐とを結び付けようとする意図を持つ縁起を確認し、気多若宮祭神を正八幡宮とする異説の存在や、祭礼として放生会が行われていた事実を指摘し、宇佐や大隅正八幡との結びつきは文献上の解釈ではなく、神事の実践を伴う異説として存在していたことを明らかにした。後半部では、八幡と気多とが結び付けられていく前提に、越前一宮気比神宮との同体説の存在という仮説を提示する。まず気多社の内外において気比と気多とを一組のものと思わず説が存在していた事実を確認する。その上で気比の中世の祭神解釈について概観し、今まで注目されることなかった『塵荆鈔』の気比社縁起から、気比が異国征伐における霊社であり、国家の宗廟と位置づけられていたことを確認し、同体と観念された気比社の言説が影響を与える形で気多社でも三韓征伐伝承が語られるようになり、それらが発展して大隅や八幡といった霊社、霊神との結合を主張する縁起が語られ、また実際に八幡神が若宮で祀られるようになった、という気多社縁起の変容の道筋を提示した。

第五章 『大永神書』の基礎的考察

白山信仰の拠点の一つ、加賀国の白山比咩神社には通称『大永神書』と呼ばれる特異な書物が伝来する。白山祭神が童子の口を通して下した託宣を和文体で記すもので、当時白山社において祭神がどのように観念されていたかを知るための格好の史料であるといえよう。

本章では、まずその文章を分析し、背景にある祭神解釈を読み取り、その本文は、大方は中世に流布していた託宣や文献をもとにつくりだされたものであることを明らかにし、今まで知られていなかった、『神書』が山崎闇斎の出版した『神代巻口訣』に引用されている事実を指摘し、現存の『神書』の欠落部分の原態を復元するとともに、いかにして闇斎が極めて

狭い範囲でしか知られていなかったであろう『大永神書』を入手したかについて簡略ながらも考察を施した。闇斎の神道説を見るに、白山権現を菊理媛命と解釈するなど、吉田神道の影響が濃厚であり、闇斎と伊勢外宮との間でとりかわされたような思想的な交流が、闇斎と白山社との間にあったとは想定できない。本稿ではそうした『神書』の入手にあたって、忌部神道の関係者が関与していたのではないか、という推測を行った。『神代巻口訣』自体が近世になって突如浮上してきた忌部神道の書物であり、またその提唱者とされる広田担斎は、山鹿素行の師で、神説のみならず和歌などの古典にも精通した人物であった。この人物は『先代旧事本紀大成経』偽作に関わっていたともされるが、闇斎もまた担斎門下から神道説を学んでいたのである。担斎の来歴は不明な点が多いものの、その広大な知識の背景には様々な人々とのつながりや多量の蔵書があったことは想像に難くない。忌部氏と闇斎の関わり、『神書』の政治性など、今後の探求の方向性を示し、結びとした。